

§ ワクチン関連トピックス

トピックス I

『風疹ワクチンを受けましょう。～個人のためそして社会のために～』

あなたの接種したワクチンが周りにいる妊娠している女性を風疹から守っています。

風疹が各地で流行し始めています。先天性風疹症候群も昨年流行が認められた岡山県、明らかな流行が探知できなかった東京都でも今年報告されており、早急にワクチン未接種、未罹患の方は風疹ワクチンを受けましょう。生後12～90か月の小児は定期接種で、それ以上の年齢層の方は任意接種になります。尚、ワクチン接種後最低2カ月間は避妊が必要です。

2002年度感染症流行予測調査による男性の接種率は、15～19歳67.2%（女性83.5%）、20～24歳54.8%（73.8%）、25～29歳50.0%（80.4%）、30～34歳40.9%（87.7%）、35～39歳57.6%（75.0%）で、明らかな性差が認められる。

◆ 風しんおよび先天性風しん症候群（感染症発生动向調査 IDWR: Infectious Disease Weekly Report 週報2004年第15週（第15号）2004/4/23掲載から第20週（第20号）2004/5/28掲載より内容を抜粋）全文は <http://idsc.nih.go.jp/kanja/idwr/idwr-j.html> を参照

〈風しんの発生状況〉

風しんの発生动向は、感染症法に基づき、全国約3,000カ所の小児科定点医療機関から毎週報告される患者数により把握されている。ここ数年、その報告数はかなり少なく推移しているが、本年第20週までの報告数は、過去5年間の報告数と比較して多くなっている。昨年は岡山県において、ピーク時の定点当たり報告数1.43人という大きな流行が認められたものの、それ以外の都道府県での流行は認められなかった。本年は複数の都道府県において発生数の増加が認められている。第20週までの累積定点当たり報告数を都道府県別にみると、群馬県、大分県、鹿児島県が特に多く、次いで栃木県、沖縄県、福岡県、埼玉県などが多い。第20週の全国からの報告数は243人、定点当たり報告数は0.08人であり、都道府県別では、栃木県(0.6)、群馬県(0.6)、沖縄県(0.4)、秋田県(0.3)、大分県(0.3)が多かった。

報告されている患者の年齢群（1歳未満は6ヶ月毎、1～9歳は1歳毎、10～14歳、15～19歳、20歳以上）をみると、本年は昨年までと比較して10～14歳及び20歳以上の占める割合に増加がみられ、特に10～14歳の第16週までの累積報告数は、昨年1年間の同年齢群の累積報告数を既に上回っている。

〈先天性風しん症候群（congenital rubella syndrome: CRS）の発生状況〉

妊婦が妊娠初期に感染すると、出生児に感音性難聴、白内障または緑内障、心疾患を3主徴としたCRSを起こすことがある。CRSは、妊娠16週までの感染で起こることが殆どである。CRSは1999年4月の感染症法の施行により全数把握疾患となり、1999年には報告がなく、2000～2003年は各1例であったが、本年は第20週までに3例の報告があった。3例のうち2例は、2002～2003年に風しんの流行がみられた岡山県からである。

風しんの罹患歴や予防接種歴がない妊娠可能年齢の女性は、妊娠する以前に予防接種を受けておくことが必要である。予防接種は、風しんとCRSを予防するための最大の手段と言える。しかし、これまでに報告された7例の母親の予防接種歴をみると、「なし」2名、「不明」4名で、「あり」が1名であった。このように、稀には罹患歴や予防接種歴がある場合でも十分な免疫が獲得されていないこともあるので、場合により妊娠前に抗体検査を行うことも必要と考える。

また、妊婦の風しん罹患を防止するためには、社会全体での風しんそのものを抑制することが必要である。そのためには、定期接種の対象者だけでなく、2003年9月まで行われた経過措置の対象年齢層（1979年4月2日～1987年10月1日生まれの者）を中心に、小児から成人まで、男女ともに免疫のない人々は任意接種を受けることが強く望まれる。

さらに、小児科ばかりでなく、特に妊婦や妊娠年齢の女性の管理を行う産科や婦人科、また発症時に診療する内科、皮膚科などにおいては、地域での風しんの流行状況などに細心の注意を払う必要がある。